武蔵野

埼玉大学図書館

2011年 7月25日 9号

未来を創る－大学から

大学での学びを未来の創造に

「何を」「どのように」学ぶのか

はじめに　東日本大震災から既に４ヶ月が過ぎました。だれも経験したことのない大災害からの回復と新たな地域づくりが、懸命に進められています。一方で、福島原発事故の放射性物質・放射線による汚染は、いっそう深刻の度を増しています。「汚染稲わら」で飼育した牛の肉が、「国の暫定規制（基準）値」を大幅に超えていることが東京都の検査で発覚しました。「稲わら」の高濃度セシウム汚染は、福島県にとどまらず、宮城県・岩手県などに拡大しています。静岡県の「新茶」が基準値以上に放射性物質に汚染されていたことも合わせると、少なくとも関東・東北日本全体に大量の放射性物質が降り注いだことがわかります。

私たち庶民の不安をさらに強くするのは、放射性物質の二次汚染による内部被曝です。「汚染牛肉」は、ほぼ全国に流通し、すでに消費者に食されているといいます。「稲わら」が汚染されているなら、野菜や果物は果たして安全なのか？今作付けされていて秋には収穫を迎える「新米」の汚染はどの程度なのか？今も流出が続く汚染水による地下水汚染、海洋・海産物汚染の広がりはどのくらいなのか？多くの人がさまざまな疑問を持ち、不安をつのらせています。人々は、危機的な現実に対する安全策・防護策を模索しています。そのためには、現実を正確に把握することが大切です。

今も続く震災の被害、特に原発事故の被害に直面して、日常社会における私たちの「思考」や「行動」や「意志決定」の仕方やあり方は、大学における教育・研究と深く関わる問題であると改めて強く感じています。例えば、放射線は、私たちの五感（視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚）で知覚することができません。現状を正確に理解し、適切に判断・評価するためには、客観的で精確な資料・データが必要不可欠です。資料・データを得

るためには対象の性質を細かく綿密に測定し、広く調査しなければなりません。現状の把握は、まず測定することから始まります。現実を理解する過程は、私たちの「知的な活動」・「知の働き」そのものです。まさに、埼玉大学が宣言している「研こう知と技」の重要性です。大学で学ぶ最も基本的な「知と技」の一つは、客観的な資料を得るための「知識」と「技」、そして「手続き」・「方法」の習得ではないでしょうか。実際に資料・データを収集し、それらに基づいて筋道立てて実証・論証していく「知力」を身につけるということです。先入観、予断を持って現実を解釈し説明するのではなく、「科学的」に考え行う力です。未来を「喪失」させる原発事故の大惨事に直面して、大学で培う「科学的思考」や「知的能力」を私たち自らが深く問い直してみることが必要でしょう。

大学で何を学び、未来の創造にいかにして結びつけるのか。今、大学にいる私たち一人ひとりが吟味し、それぞれの大学生活を充実させる機会にできたらと思います。今号は、フレッシュな埼玉大学生に向け諸氏諸先輩に御寄稿をお願いしました。小川晴夫氏（県立浦和図書館長）には、大学時代の学びが、社会人生活にどのように結びつくのか、人生の先輩として経験に裏打ちされた生きたことばで広く深く語っていただきました。山尾朋未さん（理学部３年生）は、「埼大」生活を振り返りつつ、若者らしい前向きな「学生生活」を推奨しています。昨年まで我が図書館でベテラン館員として尽力していただきました小野寺伸氏（国立歴史民族博物館係長）には、埼玉大学を振り返り貴重な経験と思い出をまとめていただきました。「けやきの窓」では安藤陽先生（国際交流センター長）に御登場いただきました。電子書籍が普及し、書の世界が大きく変貌する今、学生に是非一読してほしい書籍のご紹介をお願いしました。学生のみなさんには、未来を作る一歩を埼玉大学で踏み出していただきたいと願っています。

（図書館長　坂西友秀）

もしも大学時代に戻れたら

私の学生時代を振り返ってみて人に誇るものが何もないので、正直言ってこのような紙面に載せるのがふさわしいものかどうか戸惑った。しかし誰にも負けないものが一つある。私ほど怠惰で、何もしなかった、という点では誰にも引けを取らないという自信である。ほとんどの授業に出なかった。かといって、スポーツに打ち込んだわけでもなく、アルバイトに精を出したわけでもない。趣味に徹したわけでもない。大学へは毎日行っていたが、それは授業を受けるためという

より、友達に会うためであった。したがって成績は散々であったが、それでも何とか卒業できたのは、大学がロックアウトされたためにレポート提出で済むという機会が数回あったからである。

こんな私であったからこそ、もし当時の大学時代に戻れたら、これをやりたいというものがいっぱいある。第１に挙げなければならないのは学生の本分である勉強であろう。学生の時は気がつかなかったが、社会人になってしまうと時間の制約があって、なかなか勉強時間の確保が難しい。勉強しても分からない点を教えてくれる人もいない。その点、現役の大学生であれば講義を聞くという機会がある。難しい本でも講義を聞けば分かりやすくなるはずである。その本が立体的に読めるため、その内容が生きてくるというものである。

本来、勉強をするということは、孤独なものであり神経を消耗するため疲れるものである。それを乗り越えて、勉強を続けていくという事は強い忍耐力を必要とするが、大学を卒業した時点でそれが生きてくる。いい思い出ともなるであろう。わが大学生活悔いなしである。私のように怠惰な学生生活を送ったからこそ悔やまれることである。現役の大学生に対しては、まず、その点を第１に挙げたい。

第２には国語力の養成を挙げたい。

これは第１の勉強とはやや趣を異にしている。社会人になると、この国語力がさまざまな場面で要求されてくる。上司の決裁をもらうために、起案文書を作成する際生きてくるのがこの国語力である。自分の考えをいかに分かりやすく、説得力を持って上司に説明する事が出来るかどうかが問われることになる。これは会議の議論、説明会での説明でも同じことが言える。では、その国語力をつけるためにはどうしたらいいか？考えられるのは読書と思うが、私は、ここでも大した事を言う資格がない。しかし今になって悔やまれるからこそ、逆に資格があるのではないか、とも思っている。

最後は幅広い交流である。あまり頭でっかちの人間になってしまっても、社会に出て使いものにならない。世の中にはいろいろな人たちがいて様々な価値観がある、という認識を持つことが必要である。世の中に不必要な人などいないという認識である。こうした認識は一朝一夕に身につくものではない。極端に言うと自分だけは優等で、他人を受け入れる余地がない人がいる。さびしい限りである。どうせ自由な時間がたくさんあるのだから、夏休みなどを利用して世界各国に放浪の旅に出かけ、様々な国の人たちと話し合ったらどうだろうか。もちろん観光旅行ではなく。私はここでも言う資格はない。なにしろ県庁に入ってからハワイくらいしか行っていないのだ。

まだまだあるがこのくらいで勘弁してください。このような私のアドバイスが少しでも学生の皆さんのお役に立てば幸いである。

（埼玉県立浦和図書館長　小川晴夫）

大学生活折り返し地点に立って

大学に入学して 2 年が過ぎ、春から 3 年となりました。入学した当初思い描いていた大学生活と少し違ったものですが、勉強・部活・アルバイトと充実した生活を送っています。そんな中で自分はこの 2 年間で心身成長出来たのかは分かりませんが、いろいろな経験をして少しずつですが考え方に変化があったように思います。

アルバイトでは、高校生の時にしていなかった仕事を任せられるようになりました。今まではミスをしても社員の方がフォローしてくれていましたが、自分で対処し御客様に謝罪しなければならなくなり、働くということの責任感を感じました。私も 3 年生なので秋からは就職活動が始まり、社会に出るという現実味が湧いてくるはずです。まだどのような職種・方向にするかは決まっていませんが、就職してから自分には何ができるかなど考えるきっかけとなりました。

大学に入りそれまで関わったことのなかったような考え方や見方を持った人と積極的に関わるようになりました。アルバイト先のパートの方からは世間話の中で子育てなどの自分が経験したことのない話や、ひとつのニュースや仕事に対しても大人目線の違った見解が聞けます。アルバイトをしている人は同世代とだけではなく、年齢の離れた人とも積極的にたくさん交流をした方がよいと思います。さらに部活では、みんなばらばらの考えを持つため、よりよい方向で運営をしていくために意見を出し合うことが必要です。みんなでひとつのものを作ることは衝突も起きてしまいますが、様々な意見を聞くことによって考えを柔軟にして自分の視野が広げることができると思います。また何かに真剣に取

部活は楽し・打ち込めるものを！

よき仲間たち

り組むことの大切さも感じました。何か打ち込むことがないと、日々をなんとなく過ごし活力のない生活になりがちだと思います。そのまま講義をさぼりだしたりする人も少なくないのではないでしょうか。学生なので学業に打ち込むのが一番望ましいのかもしれませんが、今一番好きなことや将来のためになることなどなんでもよいです。何か打ち込めることを見つけられたらメリハリのある充実した毎日を送ることができると思います。

そして特に大切だと感じたことは、自分のやってみたいことに臆することなく挑戦するということです。まとまった時間をとることができるこの学生の時期にしか挑戦できないことは多くあると思います。やらないで後悔するくらいなら、やってから後悔した方がいいはずです。

大学生活の折り返し地点に立った今、まだやりたいことがたくさん残っています。2 年間でどれだけのことができるか分かりませんが、これからも多くの事に挑戦していきたいと思います。

（理学部　山尾朋未）

平成２３年度
新入生向け図書館オリエンテーション

4 月 18 日（月）から 22 日（金）にかけて、平成 23 年度の新入生向け図書館オリエンテーションが開催され、計 5 日間で延べ 91 人の参加がありました。今回のオリエンテーションでは、図書館の基本的な使い方を説明しながら、今後の図書館での学習活動をより円滑にしていくためのきっかけになるような情報の提供をしました。

まず前半はグループ学習室から、スライドショーによる説明の始まりです（左写真）。図書館の資料・サービスの利用方法についての概要に続き、欲しい資料にたどり着くまでの手順の紹介がありました。「この本を読みたい」と考えたとき、「レポートを書くのに何かいい資料はないかな」と迷ったとき、このオリエンテーションで学んだことが役に立ちます。

オリエンテーションの後半は、いよいよ館内ツアーです。まずは閲覧室の案内からスタートしました。ここ、埼玉大学図書館は大きく分けると 2 階に自然科学、3 階に社会科学・人文科学の資料が置いてあります。次に雑誌室です。雑誌室最大の特徴は電動書架です。使い方が少し難しいですが、オリエンテーションに参加すれば操作は思いのまま、欲しい資料が簡単に手に入るようになります。最後にカウンター付近です。資料の貸出・返却についてはもちろん、情報端末など様々なサービスが用意されています。視聴覚資料を利用できる AV ブースや国際交流コモンズなどの特設コーナーもあります。図書館の入口ゲートを抜けたすぐ近くには、埼大コーナー（教員著書）があり、先生方から寄贈のあった著書が置いてあります。

実はこのオリエンテーション、図書館にとって春の風物詩となっています。図書館を使ったことがある人も、そうでない人も必ず何かの発見があるよう毎年開催しています。この記事を読まれた皆さん、来年度のオリエンテーションをどうぞご期待ください！

（情報サービスチーム　岩崎真美・成田義樹）

けやきの窓

私の推薦図書

時代小説や警察小説が好きだからといって、それらを推薦しても、「武蔵野」の読者の皆さんには「ふぅーん」、「へぇー」と言われそうである。そこで、経営学・企業論という専攻分野との関連で、興味を持ってもらえそうな小説を推薦してはどうかと考えた。曰く、「小説を読んで現代企業・社会を考える！」

私が推薦したいのはアーサー・ヘイリー（1920 年 - 2004 年）とその作品群である。ヘイリーはイギリスで生まれ、カナダとアメリカで作家生活を送った。40 歳近くになって小説を書き始め、77 歳で単著としては 10 冊目の小説を書き、それが遺作になった。寡作ではあるが、いずれも大著であり、ベストセラーになっている。40 年の作家生活で、4 年に 1 冊の割合で書き、どれもが読者から高い評価を得た作家であった。

作品を示せば、以下のとおりである（出版年順不同）。『自動車』（Wheels、1971 年）、『マネーチェンジャーズ』（The Money Changers、1975 年）、『エネルギー』（Overload、1979 年）、『ストロング・メディスン』（Strong Medicine、1984 年）、『大空港』（Airport、1968 年）、『 ホテ

ル』（Hotel、1965 年）、『ニュースキャスター』（The Evening News、1990 年）、『最後の診断』（The Final Diagnosis、1959 年）、『殺人課刑事』（Detective、1997 年）、『権力者たち』（In High Place、1962 年）。原題と邦訳を対比させただけでも“面白い”と思いません？

自動車、銀行、電力、製薬、航空、ホテル、放送局、病院、警察、そして政治といった現代の企業・社会が小説の舞台である。ヘイリーの作品の特徴は、綿密な取材にもとづく情報量の豊富さにあり、ホテルや病院など 1960 年代～ 90 年代のアメリカの企業・組織がどのような仕組みのもとで動いており、我々の日常生活とどう関わっているかを読者に教えてくれる。企業理念・戦略、原発、薬害、ハイジャック、女性の社会進出など、現代でも通じる社会問題を描きながら、人間模様をちりばめて、娯楽作品に仕上げている。

アーサー・ヘイリーは、企業における利潤追求と社会的使命を永遠のテーマとしており、そこに「アメリカの良心」を垣間見る。東日本大震災以後、企業の社会的責任（CSR）のあり方が問われているが、何かしらの示唆を受ける小説である。最近は文庫本も手に入らなくなったが、『自動車』、『マネーチェンジャーズ』、『エネルギー』は埼玉大学図書館にもあり、ぜひ一読をお勧めしたい。

（国際交流センター長・経済学部教授
安藤 陽）

埼玉大学在職30年間を振り返って

私は、平成２３年４月１日付けで国立歴史民俗博物館に異動しました。もう異動など無いと覚悟し始めていたところにいただいた異動の話でしたので、驚きました。通勤時間が、家から新しい職場までが約１２０分かかることは、何度かプライベートで行ったことがあるので分かってはおりました。じつは、異動先までは通勤時間が１時間程度を希望していましたが、根が楽観主義なので何とかなるだろうと考えてお受けしました。

それでは、埼玉大学の在職期間を振り返ってみます。私が採用されたのは、昭和５６年７月１日で、配置場所は教育学部学務係でした。当時は、学生運動によるデモがまだ時々行われていて、確か初めて埼玉大学に足を踏み入れたときにも、学内をヘルメットをかぶった学生が角材を持って行進していました。また、学務係の窓口に座っていたときにも遭遇したことがありまし

た。学務係の窓口は教育学部Ａ棟入口の正面にあるのですが、デモがこちらに向かって真っすぐに向かって来たので、恥ずかしいことですが、怖くなり窓口から逃げたことがありました。教育学部での３年間での経験はいろいろありましたが、この期間に得たことは、その後の勤務に大いに助かることばかりでした。学務係員として得た知識ばかりではなく、多くの違った係の方々と知り合えたことは私にとって大きな財産となりました。附属図書館への配置換えの時には、周りの方から『図書館は専門家集団だから､入ると苦労するから覚悟しなよ』と助言をいただき、せっかく学務係員として半人前くらいにはなれたと思っていましたので、このまま残るべきかと悩みましたが、小さなころからの希望職種でありました図書館職員になれるせっかくのチャンスなので、思い切って異動を決断しました。

昭和５９年４月１日に、附属図書館の運用係に配置換えになりました。始めに担当したのは、登録された図書を閲覧室に出すための装備でした。特に、ブッカーをかけるのが難しくてたいへんでした。そこから２７年間図書館にお世話になるのですが、その間に学術情報係、受入係、整理係、図書情報係、資料サービス係、図書管理係、利用サービス係、情報サービスチームの順番で配置換えがありました。最も短かったのが最初に配置された運用係の約１年間で、最も長かったのが受入係の約７年間でした。それぞれの係でいろいろな思い出があります。

学術情報係は、係長と係員の計３人でした。担当は、埼玉大学利用者からの申し込みのあった資料を、他大学等の図書館から取り寄せることをしていました。当時は、現在のようにパソコンで検索して探すのではなく、各図書館の蔵書目録や学術情報センター発行の学術雑誌総合目録（冊子体）を使って所蔵している図書館を調べて依頼していました。難しい資料が埼玉大学の参考図書では調べられない場合には、国立国会図書館などに土曜日の午後に出かけていました。

図書管理係に配置換えになった年は組織換えが行われ、図書館から総務係という名称の係が無くなりました。その代わりに、私が担当した図書管理係は図書系の受入れと管理が担当なのですが、元総務係が担当していた物品系の受入れや管理も兼任することになりました。当時の専門員が総務系の業務に関して協力してくれたおかげで、何とか１年間乗り切れたのでした。

いろいろ研修にも出していただきましたが、時に印象に残っている研修が次の３つです。１つ目は、会計事務研修です。埼玉県比企郡嵐山町にある国立女性教育会館で４泊５日の研修を受けました。受入係で図書の発注や受入を担当していた時なので、現在行っている業務を理解するための勉強ができて、たいへん助かりました。その際に教育学部時代に面識があった会計系の職員の皆さんとともに研修を受けることで、より深く知り合えたことが大きな収穫でした。２つ目は、コンピュータ関係の研修です。研修を受けた日程は忘れましたが、会場は東京工業大学でした。関東甲信越の大学職員が集まって、コンピュータの基本的なことを、同大学の研修所に宿泊して暑い中で勉強しました。確か演習の中で、手書きである作業のプログラムを書いて、その

プログラム通りにコンピュータが動けば合格というものがありました。研修所で泊まり込みで行われていたので、苦労された方は夜中までかけて作成していました。３つ目は、大学図書館職員長期研修です。筑波大学に２週間、オリンピックセンターで１週間、全国の中堅大学図書館職員が集まって研修を受けました。そこで受講した講義などで得た知識はもちろんですが、他大学図書館の職員と知り合えたことが、その後の図書館業務に大いに役立つことができたと思います。

プライベートでは、ジョギングクラブに所属していました。最初は、テニスのための足腰の鍛錬のために始めたジョギングでしたが、クラブに入って皆と大会に出たり、駅伝をしたりするうちに、テニスよりもジョギングに打ち込む量が多くなってしまいました。

このようにして、埼玉大学で３０年間勤務してまいりましたが、私のような者が続けて来られたのは、良き先輩や他館や埼玉大学内の多くの職員の皆様からの叱咤、激励とご協力のおかげです。どうもありがとうございました。

最後に、「大学共同利用機関　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館」のことを書きます。国立歴史民俗博物館は、千葉県佐倉市の佐倉城址にあります。原始・古代から近代に至るまでの歴史と日本人の民俗世界をテーマに実物資料に加えて精密な複製品や学問的に裏付けられた復元模型などを積極的に取り入れ、日本の歴史と文化についてだれもが容易に理解を深められるような展示をしております。図書室では、その趣旨に沿って日本の歴史学、考古学、民俗学、その他関連する分野の図書資料を中心に収集・保管をしています。毎年４回の企画展示が開催していますので、興味ある企画があれば、少し遠いかもしれませんが、良かったらお出でください。年間行事などの詳細は、歴博ホームページをご覧ください。

（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館管理部研究協力課図書係長／ 小野寺　伸）

お知らせ
図書館の節電対策について

東日本大震災の影響による今夏の節電策として電力使用制限令が発動され、本学でも「埼玉大学節電対策計画」が策定されました。これに従い、本学図書館では、以下のとおり節電に対する取り組みを行っています。

〇照明の一部減灯

館内照明について、照明器具の一部をはずし、間引き消灯をしています。

節電：照明の間引き

網戸の設置

〇冷房温度は28度に設定

冷房は室温 28 度よりも下がらないよう空調を調整します。

また、第 3 閲覧室の空調設備は旧式のため、他の部屋の空調に比べ消費電力が大きいことから、使用は可能な限り控えています。暑いと感じられるかも知れませんが、扇風機をご利用ください。

〇洗面所の暖房便座等の停止

トイレ内に設置しているハンドドライヤー及び個室大便器の暖房便座・温水洗浄を停止しています。

〇パソコンの節電設定

情報端末コーナーのパソコンを節電モードに設定しています。

〇その他にも、自動ドアの停止・エレベーター停止（特殊事情を除く）や、利用環境整備の一環として、第 3 閲覧室をはじめとする未整備だった窓への網戸設置、館内ゴミ箱の増設、閲覧室用椅子の座面張替補修なども行っています。

上記以外にも節電できるものは積極的に心掛けていますが、節電への取り組みは、今後の状況の変化等により変更する場合があります。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解ご協力をよろしくお願いします。

（ 図書情報課管理チーム　須永博夫）

2011年度　図書館会議委員

埼玉大学総合情報基盤機構図書館会議委員名簿（平成23年度）

平成23年4月1日現在

所　属　・　職　名	氏　　名	所　属　・　職　名	氏　　名
図書館長	坂西　友秀	経済学部教授	田中　恭子
教養学部副学部長	山本　　充	理工学研究科准教授(理学部)	塚原　伸治
教育学部副学部長	斎藤　享治	理工学研究科准教授(工学部)	山根　　敏
経済学部副学部長	柳澤　哲哉	全学教育・学生支援機構 副機構長	安冨　　博
理学部副学部長	坂井　貴文	国際交流センター准教授	比奈地　康晴
工学部副学部長	重原　孝臣	研究協力部長	谷本　　滋
教養学部教授	山中　信彦	図書情報課長	高橋　　輝
教育学部教授	薄井　俊二		

既刊　「 武蔵野 」一覧

埼玉大学図書館報「武蔵野」は、図書館の動向や皆様のご意見などを紹介する小冊子です。「むさしの」の後継誌として、2009 年 6 月から刊行しています。

1号（2009.6刊）

・「武蔵野」創刊（図書館長：坂西友秀）

・図書館ニュースの発刊によせて（総合情報基盤機構長：川橋正昭）

・旧制浦高記念展示室の完成を願って　（旧制浦高同窓会常務理事：上田治三郎）

・館員通信（利用サービス係長：小野寺伸）

2号（2009.8刊）

・SUCRA について（専門員：村田輝）

SUCRA（機関リポジトリ）で利用の多い文献トップ30

3号（2009.10刊）

・大学図書館に望むこと（埼玉県立白岡高等学校・教諭：　若海由美）

・こんな図書サービスがあればいいな～（文化科学研究科博士課程：　李芝善）

・けやきの窓（理工学研究科長：　水谷忠良）

・館員通信（元利用サービス係：　白本清香）

4号（2010.2刊）

・歴史史料デジタル化の現状：　過去の記録は誰のものか（教育学部准教授：鈴木道也）

・けやきの窓：　私の推薦図書（経済学部長：伊藤修）

・「図書館と県民のつどい埼玉 2009」:「デカンショ」と「ファーブル」（利用サービス係長：小野寺伸）

・「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告（SALA 広報担当：湊伸子）

・ホームページがリニューアルされます！（工学部４年　渡邊雄）

5号（2010.4刊）

・＜フレッシュマン特集号＞

・図書館紹介（図書館長：坂西友秀）

・図書館オリエンテーション

・図書館発見

「留学生・留学希望者にうれしいニュース」

「グループ学習室新設」

「官立浦和高等學校記念資料室」

・「デカンショ」によせて（埼玉大学教養学部准教授・哲学：高橋克也）

・子どもと図書・文化

「埼玉大学図書館の児童サービスについて（埼玉県立久喜図書館：山元明美）」

「そよかぜを知っていますか（そよかぜ保育室：橋本慶子）」

・けやきの窓（教養学部長／教授：高木英至）

6号（2010.7刊）

・〈埼玉大学エコ特集〉

・AGRICULTURE （図書館長：坂西友秀）

・埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪（経済科学研究科博士前期過程：堀合知子）

・有機農業に興味を持たれた方へ（経済科学研究科博士前期過程：堀合知子）

・有機農業に出会って（経済科学研究科 1 年：山本仁）

・お薦めの本（経済科学研究科 1 年：山本仁）

・埼玉大学有機農業研究会の展望（経済科学研究科：有坂昌平）

・本の紹介（経済科学研究科：有坂昌平）

・日本大学文理学部図書館研修（図書資料係：早川雅代）

・けやきの窓（教育学部長／教授：山口和孝）

・全国国立大学図書館協会総会報告（図書館長：坂西友秀）

7号（2010.11刊）

・（特集　教育・研究と書籍）

・はじめに（図書館長　坂西友秀）

・過疎という問題に何処よりも早く直面した早川南小学校について（山梨県早川南小学校校長　村松秀樹）

・絵本を用いた活動が自閉症児に与える効果について（教育学部教育心理カウンセリング専修 4 年　成瀬酉）

・「アナログ本」の存在感（森野うさぎ）

・私たちは電子書籍と電子教科書にどう向き合うべきか（教育学研究科学校臨床心理専修　孕石敏貴）

・けやきの窓（英語教育開発センター 長／教授　外山昇）

・埼玉大学の教育・研究と埼玉大学生活協同組合（埼玉大学生活協同組合理事長／経済学部　岡部恒治）

・既刊「武蔵野」一覧

8号（2011.4刊）

・（図書館の 1 年）

・東日本大震災からの復興を願う－「原発事故」が突きつけたもの－（図書館長　坂西友秀）

・知の世界への眩しさ（日本青年館公益事業部長・業務部長　佛木 完）

・大学の猫たち（理工学研究科教授　小松登志子）

・私の推薦図書（脳科学融合研究センター長／教授　中井淳一）

・埼玉大学図書館の活動

・既刊　「武蔵野」一覧

9 号（2011. 7 刊）

・大学での学びを未来の創造に　（図書館長　坂西友秀）

・もしも大学時代に戻れたら（埼玉県立浦和図書館長　小川晴夫）

・大学生活折り返し地点に立って（理学部　山尾朋未）

・平成 23 年度　新入生向け図書館オリエンテーション（情報サービスチーム　岩崎真美・成田義樹）

・「けやきの窓」-私の推薦図書-（国際交流センター長・経済学部教授／安藤陽）

・埼玉大学在職 30 年間を振り返って（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館管理部研究協力課図書係長／小野寺　伸）

・お知らせ-図書館の節電対策について　（図書情報課管理チーム　須永博夫）

・2011 年度　図書館会議委員

・既刊　「武蔵野」一覧

※ 図書館ニュース「武蔵野」は、埼玉大学図書館ホームページ・「図書館出版物」でご覧ください.